



女の子  
になつて  
幼馴染と

「テスト勉強してる？」

「あ？いや、全然してね〜」

「そんなんで大丈夫？」

「なんとかなるでしょ！」

「はあ…遥歩さ」

「もっとしっかりしないと…」



「そうだ！帰ったらウチで一緒に勉強する？」

「わかんないとこ教えるよ！」



「え？い、行かねよ！」

「昔はよくウチ来てたじゃん！」

「昔の話だろ？」

「じゃあ、私が遥歩の家に行くのは？」

「ダメ！」

「ケチー！」



「あれなんだろう？」  
「ん？何が？」





「あの空の……」  
「雲？じゃないよな……？」  
「あんなの知らないよ」



「なんか……デカくなってるじゃないか？」  
「うん……」  
「それになんか……声が聞こえるような……」  
「声？」





「とまらないい！」

「え！女の子?!」

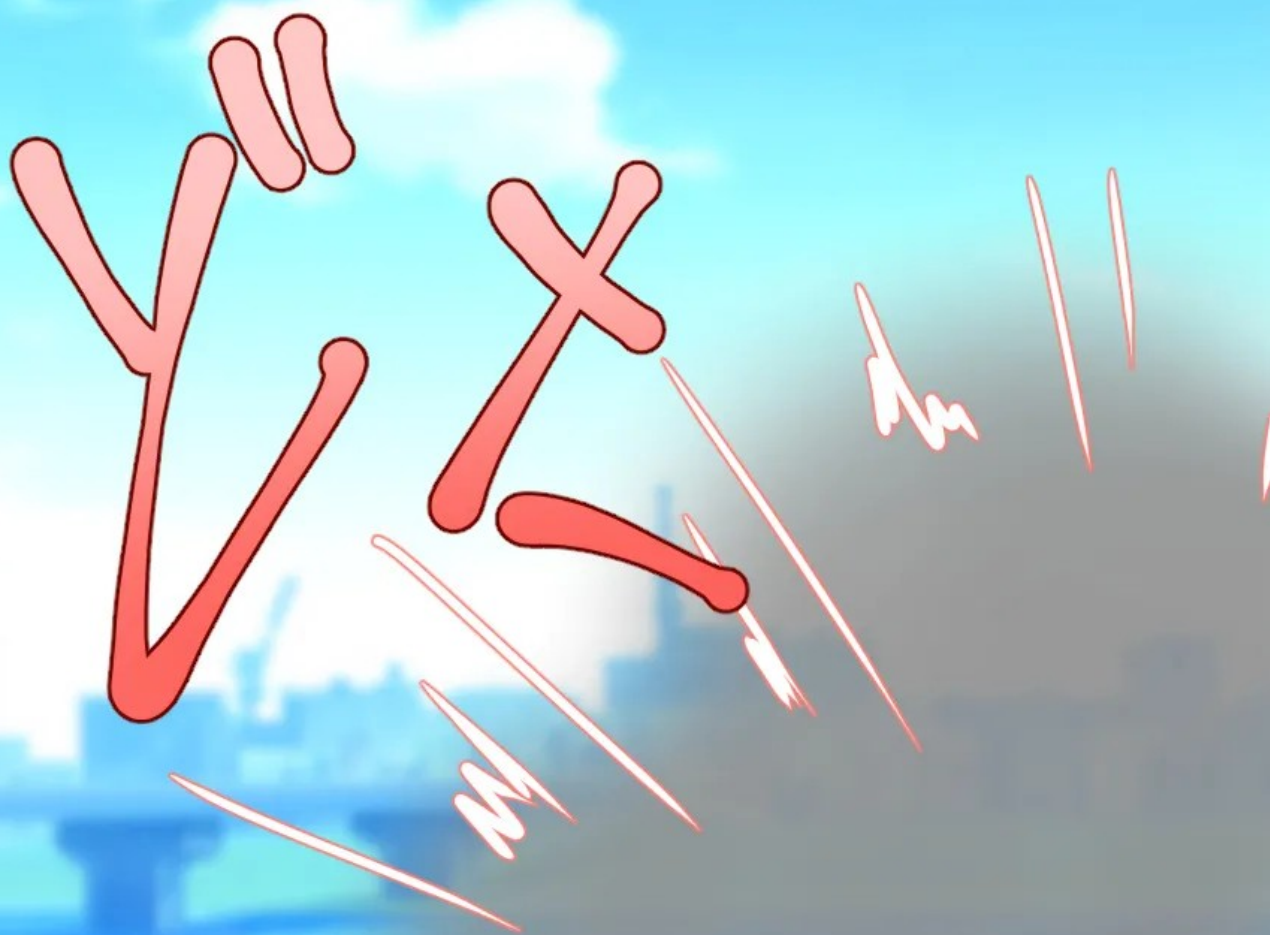
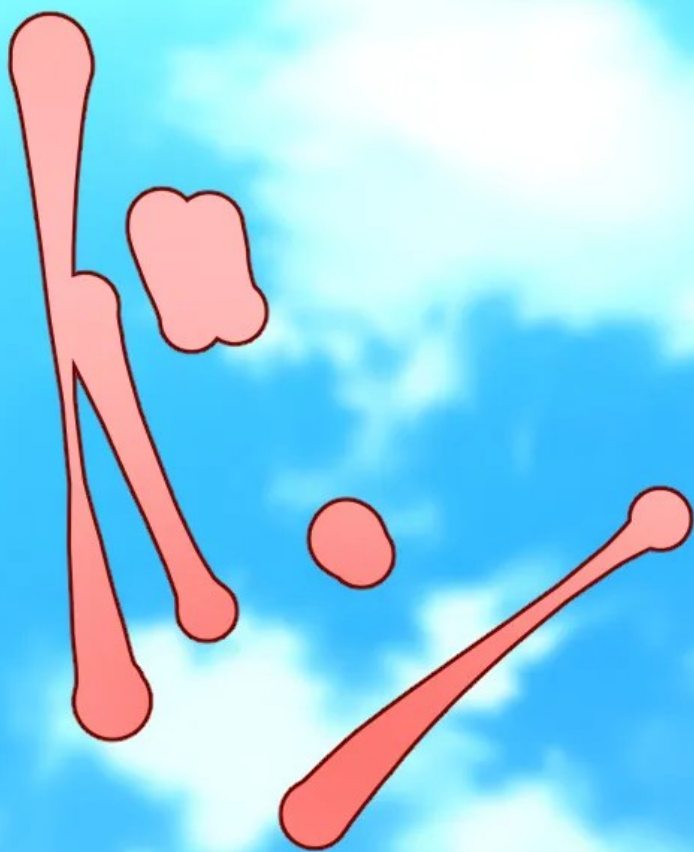
「嘘!？」

「あああああああ！」



「ちよ、ちよとまっ！」  
「どおおおしよおおお」  
受け止めるか!?!  
でもこのまま避けたら...

「うっ！」  
「ああああ！」  
「ちよつと！遥歩！」  
「大丈夫！？」



「あいたた……」

「まさか……こんなとこまで来るとは……」

「おい！お前、大丈夫か！？」

「なんで空から……」

「それにその姿……」



「え！待って！遥歩！」

「ん？なんだよ？」

「あつ！園崎も怪我ないか！？」

「だ、大丈夫だけど……」

「遥歩……その姿……」

ん？どこか怪我でもしたか？

hmm



「あら!しまった!」

「すまんことをした!」

「え?」



「うわあ！なんかある！？」  
「遥歩が女の子になってる！？」  
「いやあ……まさか、性転換の魔法がかかるとは」  
「どうなってんだ！？」



「女の子って・・・俺が・・・？」  
「どうなってんだ？」  
「園崎・・・どうしよう・・・？」  
「わ、私に聞かれても・・・」  
「そ、そうだよな・・・」



「おい！お前！」

「お前の仕業なんだよな？」

「じゃあ、なんとかできるよな！？」

「お？ああ出来るぞ」

「良かった！」

「じゃあ、元に戻してくれ！」



「ああ……出来るが……」  
「今は、無理だあ……」  
「魔力を使いすぎて……」  
「え？」



え…

「さつき、自分の魔力が暴走してしまつて…」

「お前に魔力がぶつかつて…」

「それが収まつたんだが…」

「その際に魔力のほぼ無くなった…」

「寝て起きたらまた魔力が回復するから…」

「それまで…それで…」

「生活…してくれ…ふあ…」





「待て！それっていつだ！？」

「さあ……わからん……」

「起きたらすぐに直すよ……」

「おやすみ……」

ウト……

ウト……

トヤ...

「おい！待てー！」

「遥歩……」

「マシで寝た……」





「これからどうしよう…。」

「とりあえず、母さんにはなんて言えば…。」

「私も一緒に説明するよ…わかってくれればいいんだけど…。」

「ああ…悪いな…。」

「ありがとう」



「あとその子……」

「ここに置いておく訳にもいかねえし」

「それにこんな格好でいたら危ねえよ……」

「こいつの話が本当なら起きたら戻せるみたいだし」

「しばらくは俺の家で預かればいいんだけど……」

「その辺も一緒に話してみても願ひしよう……?」

「ああ……そうだな……」

「あとは……学校か……」

「この時期に休むのは……」

「だよな……それにいつまでかかるか……」



「あのさ……制服貸そうか？」

「は？」

「とりあず学校には行くうよ！」

「先生たちにもなんとか説明してさ！」

「そんなの理解してくれろと……？」

「なんとかなるおよ！手伝うから！」

「お、おう……」



それから俺たちは家に帰り

今の状況を説明した

もちろん素直に信じるわけも無く

説得はそれなりの時間がかかった。

最終的には園崎が嘘をつくような子ではないと信じて

この状況を受け入れてくれた。

正直、園崎がいなければ俺は今頃、この女の子と野宿していたかもしれない。

園崎のは感謝しかない……

この日は説明などさまざまに事に疲れ  
部屋に戻るなりすぐに寝てしまった。

朝、親から制服の入った紙袋を受け取った。

あのと園崎が家から持って来たという。

例の女の子はウチで預かる事になった。

ちなみに、今も寝ている……




着替えて学校か・・・正直、今日は休みたかった・・・

でも、ここで休むともう行かなくなってしまう気もする・・・

「はあ・・・着替えるか・・・」

そうか・・・俺は今・・・

つまりこの下は・・・



「遥歩う！早くしないと遅刻するよ！」  
「変な事してないで早く着替えておいでえ！」  
「はあ！変な事なんてしてねえよ！」  
「どうだか！」  
「ほら、美玖瑠ちゃん来たわよ〜」  
「わかったよ！」  
くっそ……あのバグア……

下着まで用意されてるし……  
これって園崎の……

くい

これは仕方ない！仕方ない事だ！  
用意されてるんだから！  
ちゃんと穿かないとな……！！



「うう……」

なんか変な感じだな……

女子はこんな感じのを穿いてるのか？



「遥歩！いつまで時間かけてるの！」

「わあ！い、いま行くから！」

「すぐに行きます！」

「制服のサイズぴったりで良かった！」

「うう…あんまり見んなよ…」

「ええ〜いいじゃん！めっちゃ可愛いよ！遥歩！」

「うるさい！早く学校行くぞ…」



「それにしても遥歩のお母さんに理解してもらって良かったね」

「ああ……園崎のおかげだよ……ありがとな……」

「そ、それに……」

「ん？」

「その……制服とか……」

「いいよ！いいよ！」



「ち、ちなみに……」

「下着も入ってたんだけど……」

「あっ！ちゃんとつけてる！？」

そ、か…

「い、一応……あれって……もしかして……」

「よかった！ノーブラとだったらどうしようかと！」

「ちなみに、新品のやつだから！」

「お、おう……新品なら良かった……」



「ふふ…もしかして私のだと思ったの？」

「ち、ちげえよ！」

「もう遥歩のエッチ♡」

「ちげえって！」



学校には俺の親戚が仕事の都合で一時的に転校してきた生徒。

期間は不明だが、仕事が終わればまた転校するという事になっている。

ちなみ俺は事故に遭い遠くの病院で入院ししばらく学校を休む形になっている。

どうやら、本当の理由を知っているのは学園長だけらしい。

園崎の親が学園長と知り合いらしく

昨日の夜に俺の親と一緒にお願いしたらしい。

学園長は意外にも話をすんなりと受け入れたようで、全面的にバックアップしてくれるようだ。

話によれば学園長はこういう非日常のようなことが好きらしく「漫画みたいな出来事に関われるなら喜んで！」  
つとといった感じになったらしい。

「へえ〜西野くんの親戚なんだ！」

「ああ……」

「でも、西野くんも災難だよね……こんなタイミングで事故に遭うなんて……」

「そうだね……残念……でも命に別状ないみたいだし……」

「そうだね……早く良くなつてほしいね！」



「そう言えば下の名前は？」

「え？あゆむだけど……あつ」

しまった……つい癖で……

「あゆむ……？」

「西野と名前まで一緒じゃん！？？すげえ！」

「親戚で名前が一緒とかめっちゃすげえじゃん！」

「西野が早く帰ってきたらダブルあゆむで遊ぼうぜ！」

「あつ……うん……」



「おっとチャイムだ・・・次、ウチらのクラスと体育だよな！」

「行くうぜ！」

あつ・・・そう言えばこの時間は合同で体育・・・

ん？待て！体育！？つまり着替えて・・・

「ほら更衣室行こうぜ！」



「遥歩」

「お！園崎！ちよつと良かった！」

「一緒に行こうぜ！」

「え？あつ……」

園崎も気づいたよな！これはちよつと一大事かも！





「いや、まさか西野と名前まで同じとかびっくりだよな！」  
「びっくりっす！めっちゃ奇跡じゃない？」

「園崎は知ってたのか？確か西野と幼馴染だろ？」

「え？あつ。。。うん」

「何だよ、知ってたのか！それもそうか！」

「こんな面白いのあいつが黙ってるわけないか！」

〇〇〇



どうしよう。。。俺ここに居たらダメだろ。。。

「お！その下着初めてみた！」

「気がついたか！この前買った！」

「なんか彼氏がこうゆうのが好きみたいでさ！」

「ラブラブっすね〜」



「ん？園崎、早く着替えないと遅れるぞ？」

「あつ……うん。そうだね……」

「あゆむも何ポーとしてんだよ？」

「早く着替えて行くぞ？」

「あつあつ……」



あつ……園崎の視線が痛い……

「ご、ごめん！俺、体調悪いから保健室行くわ！」

「え！大丈夫か？場所わかるか？」

「だ、大丈夫！わかる！わかるから！」



「俺っ子すね〜」

「結構焦ってたから結構ギリギリだったのかな？」

「あゝ悪いことしたかな〜」

「だ、大丈夫だと思っよう……あはは……」

「授業終わったら保健室に見舞い行くか？」

「そうっすね！」

「園崎も行くだろ？」

「あ……うん」



「はあ……はあ……」

「危なかった……」

流石にあのまま居たら園崎との関係にヒビが……

それにしてもあんな近くで……

男子ならばらくオカズに困らないぞ……



ドドネキ

俺も今は女なんだよな……

これは俺の身体……

いや……ここは学校だぞ……

何を考えてるんだ俺は……

ドドネキ

ドドネキ





トク

「はあ……はあ……」

だんだん股が熱くなって……

俺……学校で気持ちよくなってる……

みんなが授業に向かっているのに……

俺は……

「直に……触って……」

トク

キュン

キュン





「はあ……あつ……」

すげえ濡れてる……

ヌルヌルして……

アソコも指も気持ちいい……

ハア

ハア

ア

ハア

ハア

ドネ

「あつ……はあ……」

指入れちやった……

こんなにすんなり……

「ああ」

中……あつたけ……



「ひっ！」  
人が来た！  
やばい！やばい！  
あやうく最後まででするところだった…  
とりあえず保健室行って今日は乗り切ろう…



「はあ……」

「大丈夫？」

「ああ……何とか……」

「すげえ……疲れたけど……」

「はは……そうだよね……」



「あのさ……今日、行っていい？家……」

「は？」

「ちよっと心配だし……」

「だからって家に来て何もねえよ」

「そうかもしれないけど……」

「なんかあれば連絡するから心配すんなよ」

「じゃっ、また明日な」

「……うん……」



カキ

「はあ……ただいま」

「つて……今日は夜勤だったけ……」  
部屋に戻ってちよつと寝よう……



「あいつ。。。まだ起きないのか。。。」  
俺。。。いつ戻れるんだろ。。。

↑  
↑  
↑

「...」  
寝よう...





やばい……

今日のこと思い出して……

寝れないかも……

あれ……気持ちよかったな……

……この俺の部屋だし……母さんも今日はいいな……

「もしかしてチャンス？」

「んんっ……」

「はあ……」

安心してオ●ニーできるって幸せだな……

ちよつとの間かもしれないし

今のうちだ……この身体で……

ムフ……

ムフ……



ハア

キム

も

ハア

ハア

「あっ……んん……」

湿ってきた…

熱い……

「はぁ……はぁ……」



「ああ……はあ……」

やばい……

直……すげえ気持ちいい……

今度は……最後まで……

イきたい……



気持ちいい…気持ちいい…

「ああ…♡♡」

「はぁ♡あつ♡」

どんどん濡れてく…

ヌルヌルになつていく…

手が止まらない…気持ちいい…



込み上げてきた…  
熱いのが…どんどん…  
「や…やほ…」  
「はあ♡ああ♡♡♡」  
「ス…ス…♡♡♡」



「はぁぁぁぁぁ♡」

やばい……これ……

すげえ……気持ちいい……

ドキ



ハア

ヒク

ヒク

♡♡

ドク

「はあ……はあ……」  
男より気持ちいいかも……

ハア

ドク



ビクッ

「遥歩大丈夫？」

「心配で来ちゃった」

「んん!？」

「顔赤いよ? やっぱり体調良くないの?」

「なんで!?! って勝手に入ってきてんだよ!?!」



「ちゃんとチャイムも鳴らしたし」

「声もかけたんだけど……」

「返事なくて……もしかしたら倒れてたりして……」

「心配で勝手に入っちゃった……ごめん……」

「やべえ……全然気がつかなかった……」



「大丈夫？」

「あつ。。。いや！だ、大丈夫だ！」

「でも、汗もすごいよ？」

「これは。。。その。。。」

「まあ。。。大丈夫！」

「ちよつとシャワー浴びてこようかな！」

「1人で大丈夫？」

「大丈夫！大丈夫！」

「園崎はゆっくりしてて！すぐ戻るから！」

やべえ。。。びびりした。。。

まさか、園崎がいきなり。。。

「はあ。。。」

とりあえず、汗流して早く戻ろう。。。



「ふっふっ」  
って……なんで園崎が!?



「えっ！・・・園崎？」  
「やっぱり心配だから・・・」  
「私が洗ってあげる・・・」  
「いや・・・だとしても・・・」  
「裸に・・・なることは・・・」





「見ないでよ！」

「それにここはお風呂でしょ！裸は当たり前！」

そうなのか？

園崎・・・大丈夫か？



「これで目隠して！」

「え……」

「あと……女の子の身体だし……」

トキ

「あ、洗い方とか……教えないと……でしょ？」

「え……なんか男と違うの……？」

「……わかんないけど……」

「いいから！洗ってあげるから大人しくしてて！」

「なんだこのシチュエーション……」

う、嬉しいけど……」

トキ

トキ



んき

「そ、それじゃ…洗うね」

「み、見えてないよね？」

「見えてないよ…」

「嘘ついてない？」

「だ、大丈夫だよ！」

んき

んき



「つく！」  
「変な声出さないでよ」  
「いや…仕方ないだろ…」  
「こんなの慣れてないし…」  
「人に触られるのなんてねえから…」  
「我慢して…」



滑るようなこの感じ……  
園崎の手……やばい……  
くすぐりたいような……気持ちいいような……  
やばい……声出る……  
「うっ……くっ……」  
我慢……我慢……



「このとか・・・汚れが残りやすいから・・・」  
「しっかり洗って・・・んっ」

「ひっ・・・口で言ってくれれば自分で・・・」  
「ダメ・・・私が直接触って教えたいの・・・」  
「女の子の身体のこと・・・」

「園崎・・・」



「下の名前で呼んでこれなくなったね……」

「え？」

「昔は、みくろって呼んでくれたのに……」

「それは……」

「また呼んでほしいな……」

「恥ずかしいよ……」

「今の状況より？ふふ」

「そ、それとこれとは……!」

「いつ……そんなこと気にしてるのか？」



「遥歩……」

「ん？」

「こんな事言ったら怒るかもだけどさ」

「私ね。遥歩が女の子になって」

「ちよつと嬉しいんだ……」

「昔みたいに一緒にお風呂に入ったり……」

園崎……？なんだこの雰囲気？



ドクン。

「うわっ……」

「あつやべ……タオル……」

「遥歩……はあ……」

……園崎の裸……

「いいよ……見ても……」

「私の……裸……」

キョ



ドクン...

「最近、何だかおかしいの...」  
「遥歩の事ばかり考えてて...」

「それに考えると...熱くなつて...」

「もう...我慢できそうにないから」

「だ、大丈夫...か？」

ドクン...

ドクン...





「はあ……はあ……」

「ううん……大丈夫じゃない……」

「私……遥歩と……」

どうしよう……

鼓動がどんどん強く……

ハァ  
ハァ

ハァ  
ハァ

ん  
ん  
ん

ん  
ん  
ん

ん  
ん  
ん



「あー〜Good」

「そ、園崎……どい触って……」

「ふっふっふっ……」

「遥歩の……おま●ハハ♡」

「ハハ……気持ちいぞーよ♡♡」

急に……本当にどうした？



「私が来る前に……」

「1人でしてたんじゃない？♡」

「えっ！」

「ふふ♡遥歩が部屋を出たあと……」

「シーツみたら……跡があったよ♡」

嘘！？

「私がつと気持ちよくしてあげる♡」



「そ、園崎……」

「みくるって呼んでよ……♡」

「昔みたい♡」

「本当に園崎か？」

「いつもと全然……♡♡」



「どんどん濡れてくるよ♡」

「遥歩って感じやすいのかな?♡」

「あっ!はあっ!」

「気持ちよかったら声出していいからね♡」

「今日は2人つきりだし♡」

「す、すごい...これ...」

「自分でやってた時よりも...」

「ほらもつと綺麗に洗ってあげるから♡」  
背中当たってる…  
どうしよう…俺も…  
理性がおかしくなりそう…

ピョチャ…ト





トキ

「くぱあ……♡」

「あつ……はあ……」

「中の方も……綺麗にしないとね♡」

「私が……もしっかり洗って教えてあげる♡」

「こんな……園崎に……」

「指……入れるね♡」

トキ

トキ

くぱあ……♡





「遥歩の中……すごく温かくて……」

「はぁ♡すっごく気持ちいいよ……♡」

中で園崎の指が……動いて……

「くっ……はぁ……あっ……」

気持ちいい場所に……当たってる……

やばい……





「い、イクツ……」

「ああ……♡」

「遥歩ったら♡」

「これ……やばい気持ちいい……」



「これはどうかな♡」

「ば、バカ…こんな誰かに見られたら…」

「いいじゃん♡見せよう♡」

「こんないい身体なんだから♡」

「むしる見せつけちゃおう♡」



「変なこと……言うなよ……」

「変じゃないよ♡」

「ほら……もつと気持ちよくなって♡」

「あっ……」

「いったばかりだから……」

「すごく敏感に……」



「それがいいんだよ♡」  
「ほら♡ほら♡あはは♡」  
「や、やばいからあ……」  
ち、ちからが抜けていく……  
「もっど……♡」



「また・・・イクっ・・・」

「本当に♡嬉しいな♡」

「気持ちいい顔沢山見たい♡」

「熱い・・・熱い・・・」

「はぁ♡はぁ♡イクて♡イクて♡」



「うっはああああ」  
もう…ダメ…  
「いい♡エッチな顔♡」

「遥歩・・・大丈夫？♡」

「はあ・・・はあ・・・」

「だ、大丈夫じゃないかも・・・」

「ちよつとやりすぎちやったかな？♡」

「でも気持ちよかったですよ？♡」

「・・・うん・・・正直・・・」

「ふふ♡よかった♡」

「私・・・本当に遥歩とこういう事がしたかったんだ♡」

「もう隠すのやめるね♡」

「園崎……」

「み、みくる……」

「ふふ♡やっと呼んでくれた♡」

「実は……俺も……そうだった……」

「こんな状況で言うのもなんか変かもだけど……」

「ううん♡すごく嬉しい♡」


「へ、部屋戻ろうか・・・」

「うん♡」

「戻ったら続きする?♡」

「・・・うん・・・」

「素直になってきたね♡遥歩♡」



「ああ！」

「何すんだよ!?!」

「こことか特に水が残るから綺麗に拭かないと♡」

「そんなの言えば自分で拭くつうの!」

「私が綺麗に拭くの♡」

ドキ

「それに口の割には抵抗しないじゃん♡」

「本当はしてほしいんでしょ?♡」

「う、うるさい...」

「素直になつたと思つたのに...」

「まだ反抗期かな?♡」

「でもいいよ♡綺麗にしてあげる♡」

ドキ

ドキ

キゅ♡





「あれ？綺麗に舐めとってるはずなのに……」

「どんどん濡れてくるな……♡」

「遥歩……どうして？♡」

「だ、だって……それは……」

「みくるの舌が……気持ちいいから……」

んき

ハア

んき

んき

ハア

んき

んき

「はは♡嬉しいな♡」

「やっぱり素直に言ってくれと嬉しい♡」

「もっと舐めてあげる♡」

「その…俺も…」

「みくるの…舐めてみていいか…?」

んき

んき



「ふふ♡ふふ♡ふふ♡♡」

「ふふふふ…」

「はつきり言ってくれないとおかんないな♡」

「♡Sooo…」

「お、おま…みくるのおま●こー!」

「あはは♡よく言えました♡」

「いいよ♡じゃあ、舐めあいっ♡しようか♡」





「これでよし♡」

「沢山舐めて気持ちよくなるうね♡」

「これが…みくるの…」

「すげえ…こうなってるんだ…」

「ふふ♡遥歩の息くすぐったい♡」

「はぁ♡んんっ♡」  
「遥歩…気持ちいいよ♡」  
みくるのおま●「」…!!  
「はぁ…はぁ…♡」  
みくるの味…!!  
「んん♡はぁ♡」




舌から……股から……  
感じる……感じる……  
これ……最高に気持ちいい……



みくるの……愛液……  
どンドン溢れてくる……  
「んん♡ああ♡」  
全部……舐めとってあげなきや……





「遥歩の舌……すごく気持ちいいよ♡」  
「俺も……みくるの……気持ちいい♡」  
もつと……みくるを感じたい……!!



「ああ♡私……イキそう♡」

「俺もだよ……♡」

「それじゃ……一緒に♡はあ♡」

「はあ♡うん♡」



「気持ちよかったね♡」

「……ん♡」

「♡♡♡」

なんか……こういうの幸せだな……





「今日、お母さんいないんだっけ？」

「ああ……今日は夜勤の仕事だから」

「明日の昼前くらいまでは帰ってこないよ」

「そっか……じゃあ今日泊まって行っていい？♡」

「え？お、俺はいいけど……みくるの家の人は……」



「今日は私の家も人いないんだ♡」

「なんか大事な仕事があるとかで…」

「こっちも昼くらいまでは帰ってこないみたい!」

「だから別に泊まっても大丈夫♡」

「そっか…なら…」

みくると…朝まで一緒…

嬉しいな…

「あっ！そっだ！」

「ん？」

「実はいい物持って来たんだ♡」

「いい物？」

「そう♡」





ドネ

ドネ

ドネ

「これって……」

「大人のオモチャ♡」

「いつもは自分で使ってたんだけど……」

「遥歩にも使ってみたくて……♡」

いつも使って……みくるも1人でヤツるのか……

でも、さっきの事を考えれば……



「これ…すごいいいから…♡」

「きつと遥歩も気に入ってくれるよ♡はあ♡」

すごい動きしてる…

これっておま●こに入れて使うんだよな…

これ…入れるの？

今からこれを…使うの？

「い、痛くない…？」

「大丈夫♡優しくしてあげるから♡」





「それじゃ・・・開いて♡」

「はあ・・・」

「最初は・・・こういう感じで・・・」

「なぞる感じで・・・刺激を♡」

「この振動・・・思ってたより・・・」

「気持ちいいかも・・・」



「ちゃんと濡れてからじゃないと……」

「痛いからね……♡」

「一応、ローションも持ってきたけど」

「遥歩は感じやすそうだからいらんいかもね♡」

「はあ……はあ……」

おしん♡  
おしん♡



「ふふ♡濡れて来た♡」  
「やっぱり感じやすいんだね♡」  
「可愛い♡これならすんなり入るかも♡」  
「でもゆっくり入れるから♡」  
「安心してね♡」



「あつ……んんっ……」

「入れるね……♡」

「入る……俺の中に……」

「自分以外の人に入るの見るの初めてだから」

「ドキドキする♡」

ドキ

ドキ

ドキ

あや

あや



「あっ…ああ♡」

入ってきた…

広げられて…どんどん入って…

「はは♡こんなにヌルヌルになってるから」

「どんどん入ってく♡」



「あっ♡はあ……♡」

動いてる……動いてる……

お腹の中で……これ……やばい……

「気持ち良さそうな顔♡」

「持ってきてよかった♡」



「上下にも動かすと……♡」

「うっ♡はああ♡」

「あっ……♡やばっ……♡♡」

「ふふ♡そっで♡ぽ♡♡」



「もうちやつと強くするよ♡」

「ああああ♡」

「ふふ♡すいすい♡」

「いんなど喜んでもらえるなんて♡」



これ。。。頭がおかしくなる。。。!!

「今度、もつと気持ちいいの持ってこようかな?♡」

「はああ♡あああ♡」

まだ。。。あるの。。。?

みくるって。。。思ってたよりも。。。♡



ダメだ……  
もう何も考えれなく……

「あつ♡あつ♡」

「すつ♡く可愛いよ♡」

「だ、ダメ……」

「い、イクー！」



「ああああああああ  
♡♡  
ん」



「おっ、おっ、おっ」



「ふふ♡記念♡記念♡」  
「なんのだよ……」  
「ふふふ♡♡」





「あ…」

「は…？」

「どのくらい寝てたんだろうか…？」

「にしても、寝心地のいい場所だ…」



「そうだ！」

「あの人間を戻す約束をしてた気がする！」

それにしても性転換の魔法だけでこれほど疲れてしまうとは……

まあ、早いとこ、あの者を元に戻さなくては……



向いふがさむがしいな...?

読んた本をなぞりてあつたよんさうなむねの多きやー！

次のページからおまじょくー！なむねの多きやー！

おまじょく





















































































